▲朝日新聞、毎日新聞、山陰中央新報等を代表して
ずっと「おじちゃんせんせい」　小林一茂　様
（下記参照）
後日談として、各紙の上司より取材記事を誉められたとのこと。

▲教育関係者向け雑誌「この本だいすき」（代表　小松崎　進　様）に掲載された記事を一部抜粋してご紹介します。

・保育士とか経営者とか、そういう立場の方では無く、人生の晩年を何か人の役立つことをしたいと考え、知り合いの保育園に勤め、花壇を作り、四季の花々を子ども達と共に楽しみ、野菜畑を作り、給食の食材を提供するなど、子ども達の成長をそっと応援し、コツコツと静かに作業をしている方でした。ところが、その方の側には、いつの間にか話を聞いてほしい父母や祖母や卒園生徒達が集まり、一緒に作業をしながら、悩みや苦しみを語って行くようになったといいます。

そしておじちゃんせんせいが休憩で座ると、その膝の上には、いつも絵本を持った子ども達が先を競うように集まって来ました。子ども達にとって、おじちゃんせんせいの温もりは大きな大きな宝物だったことを知りました。

せんせいは平成二十三年の七月に末期の癌で他界されましたが、その遺影の前には、一年たった今でも園児からの野の花のプレゼント、卒園生や父母達が休みを利用して語りかけて行く姿が見られるといいます。

埼玉　石見　10版　2012年(平成24年)11月29日　木曜日　朝日新聞

ずっと「おじちゃんせんせい」

園児と用務員の交流、絵本に

江津市都野津町の作家村尾靖子さん(68)が、埼玉県の保育園で「おじちゃん」と慕われた男性と園児たちの交流など実話を基にした絵本「おじちゃんせんせいだいだいだーいすき」（今人舎）を出版した。

男性は、村尾さんの講演を通して交流がある保育園「行田子羊チャイルドセンター」（行田市）の用務員だった松本儀重さん。昨年7月、病気で70歳で亡くなるまで遊具づくりや庭木の枝切り、給食の手伝い、園児たちの写真撮影、泣きやまない子をおんぶしての散歩など、何でも器用に対応した。松本さんがあぐらをかくと、園児たちは競うようにひざを取り合った。

村尾さんは、そんな心温まる触れ合いの数々を、松本さんの姉で保育園を運営する社会福祉法人「こひつじ会」理事の市川華子さん(85)から死後に教えてもらった。心を打たれて出版社勤めの知人に相談すると、絵本作りが決まった。

保育園玄関の松本儀重さんの遺影の周りには、卒園児らの花束や手紙が置かれている＝埼玉県行田市岩小玉

絵本を出版した村尾靖子さん＝江津市都野津町

卒園生の手紙や花束、遺影に

絵本は32ページ。おかあさんが恋しくて泣く子どもをおんぶし、「がまんせんでええぞ」と優しく見守る。運動会や農作業に一緒に取り組み、園児たちと仲良くなっていく。だがある日、元気がなくなったおじちゃんせんせいは、いなかのうちに帰っていく――。イラストレーターの山本祐司さんが優しいタッチで描いた。

松本さんは晩年、体調がすぐれなくても保育園に来て2階の応接間で横になって、園児たちの元気な声に耳を傾けるのを楽しみにしていた。市川さんは「子どもたちと心でつながり癒やしになっていたのかも」。亡くなった後、小学生や高校生らの卒園児が手紙や花束を持ってきてくれるのをみて、そう感じたという。

村尾さんは亡くなる数日前に保育園を訪ねたとき、松本さんが「また会いましょう」と見送ってくれた姿が忘れられない。「園児たちに愛情を注ぎ続けた、彼の生き方を伝えたいと思った。多くの人に読んでもらえたら」と話している。1470円。書店で購入できる。（小林一茂）